

ライフサイクル才三期の女性の意識と学習

天野正子(金城学院大学) 荒井俊子(お茶の水女子大学大学院) 内海伸子(お茶の水女子大学大学院)

○神田道子(東洋大学) ○木村敬子(淑徳保育専門学校) 倉内史郎(東洋大学)

関口礼子(聖徳学園岐阜教育大学) ○西村絢子(日本女子体育大学)

比嘉佑典(東洋大学) ○奥由美子(お茶の水女子大学大学院) 山村直子(法務省)

I. 研究のねらい

昨年度の大会において私達は、女子教育問題研究会社会教育部会が昭和52年度に行なった調査をもとに、「性別役割分業をめぐる女性の意識構造—公民館で学習しているライフサイクル才三期の女性の調査から—」と題する発表を行った。その後私達は、若干変更を加えた調査票により、職業をもち、公的機関で学習している女性を対象に調査を実施した。同時に52年度調査対象者のうち首都圏在住の無職の女性のみについて再集計を行った。今回発表する研究のねらいは、これらの調査結果にもとづいて、ライフサイクル才三期(子どもの直接的世話に手がかかる時期を通りすぎたあと老後に至るまでの期間)を中心とした女性の①職業生活をめぐる実態と意識、②学習内容と意識及び実態とのかかわりを明らかにし、更に③性別分業をめぐる意識の構造を分析することである。

「男女平等の達成とは、両性がその才能及び能力を、自己の充足と社会全体のために発展させ得る平等な権利、機会、責任をもちことを意味する。そのため、家庭及び社会の中で両性に伝統的に割り当てられてきた機能及び役割を再検討する必要がある」と述べているのは、国際婦人年の「世界行動計画」(国際連合)であるが、これをまたすとも、女性の諸問題を考える際に性別役割分業は避けて通ることのできない問題である。そして私達が性別役割分業をめぐる女性の意識構造を追究し

てきたのは、婦人問題解決の主体となるべき女性自身の意識を把握することを重要と考えたからである。またライフサイクル才三期を中心とした学習している女性を対象とする理由は次のようなものである。

1. 私達研究会が昭和47年に行なった調査(「女子の大学卒業後の諸活動に関する実態調査」)等からも、子どもの直接的世話から比較的自由にたふる才三期の女性は、社会的活動(職業も含めて)への志向を強く持ち、実際様々な活動を行っていることが明らかになっている。才三期になると家庭以外の役割遂行が可能になることを示している。しかし意識の面では家庭役割と他の役割との葛藤などから問題の多い時期でもある。こうした、生活の変化を基盤とした意識の変化をとらえるために才三期は適切といえよう。

2. また才三期の女性の社会的活動のうちで社会教育の場は重要なもののひとつであり、そこでの学習が性別役割分業をめぐる意識の構造とどのようにかかわるか、明らかにされねばならない問題であろう。

以下、三つのテーマについて考察を進めていくが、その際に用いる資料について、次に若干の説明をしたい。

II. 調査の概要及び分析の視点

1. 昭和52年度調査

昭和52年11月に実施したもので、もともとは東京都区内、三多摩、関西、上田の四地域

表1 年齢

	30~34才	35~39才	40~44才	45~49才	50~54才	55~60才	不明	計(N)
52年度 無職	12.1	24.8	29.8	16.3	10.7	6.3	—	100.0(553)
53年度有職	20.1	29.3	20.7	14.8	9.2	4.5	1.4	100.0(426)
	11.1	22.2	19.2	20.2	17.2	10.1	—	100.0(99)

表2 学歴

	小学校・ 高等小学校等	新制中学校・ 青年学校等	新制高校・ 旧制高女等	短大・ 師範学校等	大学・ 大学院	その他	不明	計(N)
52年度 無職	3.3	6.3	55.5	19.5	12.5	1.4	1.4	100.0(553)
53年度有職	6.8	10.1	58.7	11.7	5.2	2.3	5.2	100.0(426)
	4.0	8.1	52.5	18.2	11.1	2.0	4.0	100.0(99)

表3 配偶関係

	夫健在	離婚死別	不明	計(N)
52年度 無職	98.2	1.8	—	100.0(553)
53年度有職	91.8	6.8	1.4	100.0(426)
	77.8	21.2	1.0	100.0(99)

の公民館または社会教育課主催の学級・講座に参加している女性で、殆どがオ三期にある人達(1471票:回収率60.2%)を対象とした。今回用いる資料は、有職者対象の53年度調査との比較を明確にするため、首都圏在住で無職の既婚者について集計しなおしたものである。つまり“専業主婦”層といえていよう。プロフィールは表1~3の「52年度無職」の欄に示す通りである。

2. 昭和53年度調査

昭和53年11月~54年2月に実施。52年度調査との比較の意味で、職業を持ち、何らかの公的な機関で学習しているライフサイクルオ三期の女性を対象とした。この条件を満たす女性はもともと数少ないため、選定は難行したが、結局、八王子、千葉、川崎、川越、坂戸、上田の働く婦人の家、千葉、座間、与野の社会教育の講座、及び都区内の勤労婦人会館で行っている講座等で学習している女性852人(有効票)から回答を得ることができた。(有効回収率41.4%) この中から、未婚者、

30才未満、及び上田在住者を除き、残り525票が今回の分析で対象となる人達である。プロフィールは表1~3の「53年度の欄」に示す通りである。

3. 分析の視点

このようなデータを分析していく際には、次のように比較していくことを意図している。まずオ一は、無職層(52年度調査)と有職層(53年度調査)を比較することである。これらの層は意識と実態の両面で違いが明らかになっている。オ二は、53年度調査について学習との関連を把握しようとの目的から、学習内容を「趣味・生活技術中心型」(426票以下「趣・生型」と略す)と「社会科学中心型」(99票以下「社型」と略す)に分けて比較する。後者は票数が少ないが、貴重なサンプルと思われるので比較参考のために別に提示する。これら二つのタイプの違いはあらゆる面で大きい。Ⅲ~Ⅴに述べる分析は、以上の二つの観点に立っている。

Ⅲ. 職業生活をめぐる実態と意識

職業生活に関する実態を、「雇用形態」「継続年数」「収入」「組合の有無」「職業継続上の問題点」などをとり上げて明らかにし、さらに職業意識と職業の有無、雇用形態との関連について分析してみた。結果を要約すると以下の通りである。

1. 現在の雇用形態はフルタイム(31.6%)、パートタイム(29.2%)、その他(37.3%)にはほぼ三分される。これまでも、と職業を継続してきた者は全体の約 $\frac{1}{4}$ で、大半は中断後に再就職したり、子どもの手が離れてから働き出したたりしている。そのため現在の仕事の継続年数は短い傾向にあり、10年以上続けている者は32.9%にすぎない。これらの事情を反映して、収入は全体として低く、70万円未満の者が約半数である。職種では、事務職についている者が最も多く、官公庁・企業を合わせると全体の約 $\frac{1}{2}$ である。組合についてみると、現在の職場に組合があるのは全体の約 $\frac{1}{4}$ にすぎず、組合に加入している者は全体の13.7%、役員経験のある者は全体の5.4%にすぎない。

2. 仕事をしている理由としては、「自分の収入を得るため」が最も多い。(80.0%) また、職業を継続する上で問題点に関して、「別に問題はない」という回答が「これまで」「今」に比べて「これから」で減少している。問題を感じている内容についてみると、「家事」及び「育児」は、「これまで」「今」に比べて「これから」で減少しており、逆に増加しているのが「老人・病人の世話」と「自分の健康問題」である。

3. これらの職業実態には雇用形態によって差がみられる。すなわち、フルタイムでは職業をフルタイムで継続してきた者が多く、従って継続年数も長い。職種は事務職が約60%であり、収入も高い傾向にある。職業を継続する上で問題をもっている者が多く、「問題はない」とする割合が低いばかりでなく、多くの項目で、問題を感じている割合が高くなっている。これに対してパートタイムでは、職業を継続してきた者が少なく、再就職あるいは子どもの手が離れてから働き出した者が多い。そのため継続年数は短く、収入も低くなっているが、職業を継続する上で「問題はない」とする者の割合が高くなっている。

4. 職業の有無は「職業観」と関連する。無職層では中断型を支持する者が多く、有職層では継続型を支持する者が多い。この傾向が強いのにはフルタイムである。賃金格差は「よくない」とするものは無職層に多く、有職層全体との間に見られるが、「やむをえない」とする者もまた明らかに無職層に多い。また、「管理職を「女性もやった方がいい」という者は無職層に多く、やはり有職層全体との間に差がみられた。しかし、雇用形態によってさらに詳しくみると、賃金格差を否定する意識が最も強いのにはフルタイムであり、次いで無職層、パートタイム、その他の順となっている。また管理職を「女性も」とするものは、フルタイム、無職層が多く、次いでパートタイム、その他となっている。

5. 職業をめぐり性別分業意識では、「男は仕事、女は家庭」という意見に「同感しない」のはフルタイムに多く、男性保育者など、女性の分野へ男性が進出することは「賛成」する者も明らかにフルタイムに多い。

6. 女性が職業をもつと家庭の中で発言力が「強くなる」と考えているのは、フルタイムと無職層とである。今の生き甲斐を「仕事」とする者はフルタイムに多く、今の暮らしを「仕事に生きて」とするものもフルタイムに多い。さらに、「仕事に生きて」の希望も強い暮らし方とし、将来の展望を「職業」とするものもフルタイムに多く、次いで無職層、パートタイムの順となっている。

以上のことから、職業をめぐる意識には、職業の有無も関連するが、雇用形態がより強く関連するといえる。フルタイムは職業継続観を支持する率が高く、平等意識、共業意識が強く、生活の中での職業の位置づけが大きい。これに比べてパートタイムは、職業観では中断志向が強く、平等意識、共業意識が弱い。また生活の中での職業の位置づけは小さい。無職層は、職業観では中断志向が強く、平等意識ではフルタイムとパートタイムの中間にあり、生活の中での位置づけではフルタイムに近くなる。でいる。

IV. 学習内容と意識及び実態

今回の調査の意図の一つは、講座の学習内容と受講生の意識とがどのようなかわりをもっているかを探ることである。つまり、どのような学習内容がどのような受講者に受け入れられているかということである。

比較を容易にするために、学習内容を「趣味・生活技術中心型」と「社会科学中心型」の二つに大別して、それぞれの受講者の属性・実態・意識などを比較してやることにした。

1. 属性

年齢については、両者とも最も人数の多い年齢層は35～39才にあたり、「社型」の方やや高い年齢のかたよりがみられる。そのことは、当然のことながら、夫の年齢・末子の年齢共に「社型」の方が高く、また結婚継続年数も「社型」の方が長い傾向となっており、あらわれている。

学歴については、両者とも過半数を高校卒で占めるが、「社型」の方に高学歴をもつものが多いことが注目される。

結婚の形態では、大多数が「夫健在」であるが、「離死別」は「社型」に多い。

2. 実態

(1) 職業について

雇用形態については、「社型」はその約6割がフルタイムの職業についているのに対し、「趣・生型」はパート3割、フルタイム2.5割で、他に内職・自営が多いという違いがあらわれている。

職業継続の形態は、フルタイム継続は「社型」に多くみられる。

職業継続上の障害を「これぞ」「今」「これから」の三つに分けて比較してみると、「社型」は身金がやや高いこと、フルタイムの職業をもっている者が多いことなどの理由から、「これぞ」においては、「育児・教育」が大きな障害であったこと、「これから」は「自分の健康」が大きな障害として予想されることなどが示され、また職場の問題が障害として出てきている点が「趣・生型」と異なる点がある。それに対して、「趣・生型」の方は、「これぞ」と「今」は「別に問題はない」が一番高い率を占めることなどからも、過去又は現在において、パートや再就職の形をとって家事もそつなく処理してきたものと推察できる。

(2) 家事について

食事の後片づけ、掃除、学習指導における夫の家事分担については、「社型」の夫の方が「趣・生型」の夫より協力的であり、より高い平等観をもっているといえる。これは妻の共業への意識とも関係していると思われる。

3. 意識

(1) 性別役割分業及び平等意識について

職業に関しては、「性別賃金格差」「管理職の性別」「職業継続観」「男性の職業分野への女性の進出」「女性の職業分野への男性の進出」、家事に関しては、「家事への夫の協力期待」「男子の家事能力期待」「女子の学歴」「PTAの父母交替出席」「家庭内での発言力」「食事の後片づけ」、社会参加に関しては、「女性の政治進出」「地域活動への参加の仕方」のこの調査の性別役割分業及び平等意識に関するすべての項目

について「社型」の方が「趣・生型」より高い平等意識をもっていることがあらわれている。このことから、男女平等意識と「社型」学習内容との間に何らかの関連があるということが分る。しかし、学習の結果、平等意識が生れたのか、あるいは平等意識をもったものがこの学習に集って来ているのかは、即断できない。今後の検討が必要とされるところである。

(四) 政治意識について

「日本の政治」と「日本の女性の地位」については、「趣・生型」に比べ「社型」の方に「不満」とするものが多い。「社型」は、平等観をもちながら、現実にはそれが実現されないところに「不満」が生じ、その「不満」の解決の方法を学習に求めているのかもしれない。

(ハ) 個の生活について

「生き甲斐」「生活の展望」「自分の時間」などにおいても、両者に違いがみられる。

「生き甲斐」では、「趣・生型」が「子ども」(1位)「趣味」(2位)をあげているのに対し、「社型」は「仕事」(1位)「趣味」(2位)をあげている。「望みしい暮らし方」については、「趣・生型」が「夫と協力して家庭生活を築く」を1位にあげているのに対し、「社型」は「やりたいことを追求する」を1位にあげている。そして「生活の展望」として、「趣・生型」が健康を第一にあげているのに対し、「社型」は「職業」を第一に、「健康」を第二にあげている。また「自分のための時間」については、「充分でない・欲しいと思う」が「趣・生型」51.9%に比べ、「社型」67.7%となっている。

つまり「社型」学習に集まっている人達は、現在少数でありとはいえ、「趣・生型」に比べて学歴が比較的高く、平等意識をもち、フルタイムの職業に従事し、職業を生き甲斐とも考え、望みしい生き方としては自分なりの生き方を、主りさせて追求し

ようと志しなげながらも、政治や女性の地位については不満を感じている。そして自分の時間をもっと欲しいと思っている意欲に満ちた人達であるといえるのではないだろうか。

V. 性別役割分業をめぐる意識の構造

1. 性別役割分業をめぐる意識をとらえるため、52年度調査においては、生活の各領域(家庭、職業、地域・政治)に関する質問を設けてその構造を明らかにした。今回は52年度の質問のうち1問を除いてその子とし、他に4問を加えた。その結果は表4の通りである。ここから次のようなことが明らかになっている。

(イ) 52年度調査(無職層)と53年度調査(有職層)の比較

まず地域・政治の領域では、無職層の方が意識はより積極的であった。殊に、地域問題への参加の仕方では、大部分が「男女同様に」と答えられているとはいえ、無職層は「女性中心」、有職層は「男性中心」が多く、興味深い結果となっている。

職業観では有職層に共業意識が強いが、「管理職は男性」についてはむしろ無職層の方が共業意識が強い。

家庭領域では、男の子の家事能力では差がなく、PTA出席では、有職層の方が共業意識が強く、うな可ける結果である。

(ロ) 学習内容による比較

(1) それの項目でも、「社型」が「趣・生型」よりも共業意識が強く、一貫した傾向を示している。

2. 次に「男は仕事、女は家庭」の項目をキイとして、他の性別役割分業をめぐる意識とクロスさせたところ次のような結果が得られた。

(1) 分業意識層は、他の項目でも全て分業意識と関連し、共業意識層は共業意識層と関連

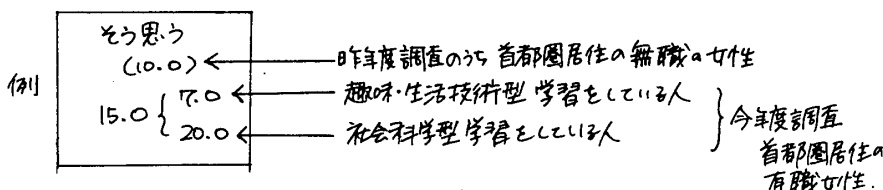
する、というように、意識の構造は矛盾のない形となっている。

(D) しかしキイの項目における共業意識(分業意識)でも、他の項目における共業意識(分業意識)の強さは多様である。

(1) 「社型」の共業意識と「趣・生型」の共業意識の間には大きい差がみられ、前者はより強い共業意識をもっている。

表4 性別役割分業をめぐる意識の分類

		共業観		不確定意識		分業観	
家庭	▶ 男は仕事、女は家庭という考え方に… (Q11)	同意する 41.7 { 36.4 } 64.7		どちらともいえない 42.9 { 46.0 } 29.3		同意する 12.9 { 15.3 } 3.0	
	▶ 男の子にも家事能力を付けさせたいかという意見について (Q21)	そう思う (63.8) 65.2 { 61.0 } 82.8		どちらともいえない (23.3) 21.3 { 23.5 } 12.1		そうは思わない (12.3) 13.1 { 15.0 } 5.1	
	▶ 一般に、夫が食事の後片付けをやることについて (Q26)	妻も夫と同じように 18.1 { 12.2 } 43.4			妻が主夫は従 57.1 { 59.6 } 46.5	夫は片づけて 22.9 { 26.8 } 6.1	
	▶ PTAへの出席は父母交替でいい意見について (Q23)	そう思う (63.5) 71.6 { 69.7 } 79.8				そうは思わない (35.1) 24.6 { 26.5 } 16.2	
職業	▶ 女性の職業をもつことについての考え方 (Q16)	無職型 (22.8) 30.9 { 23.9 } 60.6	中断再就職型 (62.7) 55.6 { 60.6 } 34.3	わからない (2.9) 3.0 { 3.8 } 0.0	短期型 (9.6) 6.1 { 7.3 } 1.0	無職型 (0.7) 0.8 { 0.7 } 1.0	
	▶ 管理職は男性がよいという意見について (Q15)	女性もよい方がよい (72.3) 63.4 { 59.4 } 80.8		わからない (10.5) 13.4 { 14.1 } 10.1		男性が当然 (15.9) 13.7 { 16.0 } 4.0	
	▶ 船員は男の仕事の分野への女性の進出について (Q25)	賛成する 44.6 { 40.4 } 62.6		どちらともいえない 34.5 { 36.4 } 26.3		賛成しない 18.3 { 20.2 } 10.1	
	▶ 保育者など女性の仕事への男性の進出について (Q27)	賛成する 75.8 { 73.5 } 85.9		どちらともいえない 15.4 { 17.1 } 8.1		賛成しない 7.3 { 8.0 } 4.0	
地域・政治	▶ 地域のゴミ処理場問題への参加の仕方について (Q18-SQ)	男女ともに同じように (83.2) 80.4 { 78.9 } 86.9			女性中心 (11.4) 0.7 { 0.5 } 2.0	男性中心 (1.6) 13.1 { 6.1 }	
	▶ 女性の政治進出について (Q17)	男女同数で進出 (13.2) 7.8 { 5.4 } 18.2	今よりも進出 (72.0) 67.2 { 67.4 } 66.7	わからない (4.2) 8.6 { 9.4 } 5.1	今よりもよい (8.1) 9.9 { 11.3 } 4.0	進出しない方がよい (1.4) 2.9 { 3.1 } 2.0	



▶ 53年度調査で新たに追加した科目

3. 性別役割分業意識と他の意識との関連

性別役割分業意識の構造を更に明確にするために、平等意識(性別学歴格差・賃金格差)・地域問題、今の暮らし方及び望ましい暮らし方に対する意識、女性の地位・くらしむき・政治に対する満足感、孤立感・無力感などの生活感情と役割意識との関連について分析した。

役割意識は、「男は仕事、女は家庭」という考え方に同感があるかどうかをキー質問として用いた。その結果、次のような傾向がみられた。

(1) 性別学歴格差を否定するのは、共業意識層にもっとも多く、次いで不確定意識層、分業意識層の順になっており、平等意識は共業意識層にもっとも強い。しかし、分業意識層でも半数強(55.4%)が平等意識をもっている。

(2) 賃金格差については「やむをえない」が多く、特に不確定層、分業意識層では半数弱がこの現状を肯定する意識をもっている。格差を否定する意識と性別役割分業意識との間には(1)と同様の傾向がみられた。

(3) 地域問題(ゴミ処理場建設)に対する態度については、権利要求型は共業意識層に多

くみられたが、その場合でも35.5%のみであった。もっとも多いのは従従型であるが、この態度は不確定層に多い。従従・傍観・無関心などの消極的態度は分業意識層、不確定層に多くみられた。

(4) 満足感でもっとも顕著な傾向がみられたのは、「今の日本の女性の地位について」であり、不満は共業意識層にもっとも多く、次いで不確定層、分業意識層の順になっている。

「どちらともいえない」という意識は不満と反対の傾向を示している。政治についても共業意識層に不満が多くみられた。くらしむきについては差がみられなかった。

(5) 今の暮らし方は家庭重視志向に強弱が集中している。望ましい暮らし方は、家庭重視志向は今の暮らし方の場合と同様だが、それとともに自分中心志向が多くなる。役割意識と関連がみられたのは、今の暮らし方・望ましい暮らし方ともに現状享楽志向であり、分業意識層に多い傾向がみられた。

(6) 「社型」の共業意識層と「趣・生型」の共業意識層を比較すると、前者は(1)~(6)までに示された傾向がより顕著であった。

表5 性別役割分業意識と平等意識

		「男は仕事、女は家庭」という考え方は				
		同感する (分業意識)	同感しない (共業意識)	どちらともいえない (不確定意識)	全体(N)	同感しない (共業意識)
性別学歴格差について	そう思う	24.6	7.7	10.7	12.0(51)	3.1
	思わない	55.4	80.0	59.7	66.4(283)	92.2
	どちらともいえない	20.0	11.6	29.1	21.1(90)	4.7
	不明	0.0	0.6	0.5	0.5(2)	0.0
	計(N)	100.0(65)	100.0(155)	100.0(196)	100.0(426)	100.0(64)
性別賃金格差について	よくない	10.8	45.8	22.4	29.8(127)	68.8
	やむをえない	49.2	36.1	49.0	43.9(187)	25.0
	当然だ	12.3	3.2	7.1	6.6(28)	4.7
	わからない	10.8	4.5	8.2	7.3(31)	0.0
	不明	16.9	10.3	13.3	12.4(53)	1.6
	計(N)	100.0(65)	100.0(155)	100.0(196)	100.0(426)	100.0(64)